

年表で読む 古平の歴史

《91》

発行・古平町文化会館
史編纂室

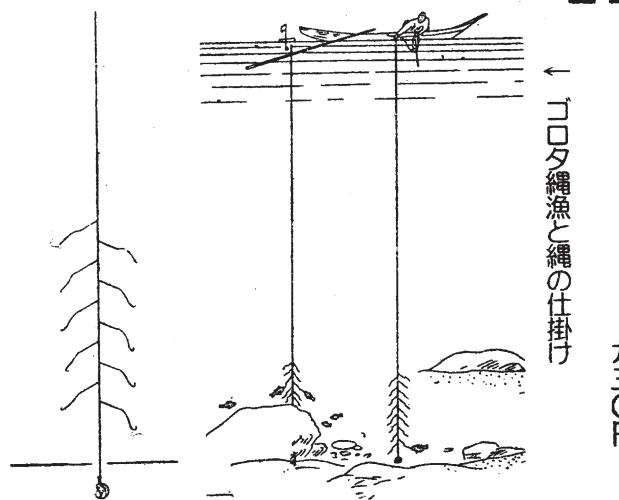
る程度で、それ以前の明治四五年には、五月中旬から七月下旬まで次ぎのように着葉していた。

としていた。
大正二年、カレイ・サンマ・ヒ
ラメ・エイなどのほか、磯魚を獲
るために底建網を使用したが、そ
の後、ソイは急激に減少したとい
う。

ソイ漁は後志地方で盛んだつたようだ、旧美國町や旧入舸村では、ゴロタ繩漁が多く行なわれていたという記録がある。

北海道から中国の海岸辺りまで分布していく。北海道では日本海やオホーツク海に多く、太平洋側には少ない。

磯の岩礁地帯に棲んでいるが、季節によつて春には浅瀬に、秋には深みに移動する。 (続く)



大正一一一年

▼七月一七日

今日は近来まれな暑さ、土用の丑の日だというので浜は泳ぎに来ている人が沢山いる。店は閑散、熊さんは出面と畠の草取り。海産物の暴落は手持ちのある者にとっては大打撃だ。だが鮭粕の相場は一〇〇石二九〇円くらい。三六〇〇~三七〇〇円で買った人が沢山いて、一〇〇石で七〇〇~八〇〇円の損害だ。

▼七月三〇日

今日も快晴、時々南風が吹き蒸し暑い天気だ。一〇時に保木老人の葬式を送る。名物男も遂に七歳で長逝された。積丹半島旅行もいよいよ明三一日と迫った。三浦まで申し込む。いろ

だ。保木回漕店老人、昨夜一〇時頃死亡されたとのことで驚いた。夜通夜に行つたが暑いのに閉口した。

高野名幸作さんの日記から

[96]

当時の世相を見る

いろと準備をする。

▼八月七日 一二時に帰る。

▼八月八日

ムシ暑いこと、ずい分と暑い。午前六時、余市から支店の泰治さんとせつちゃんが、佐渡から着いたと電話がある。一時のお外浜丸で着くというので、私とトミ、悦二を連れて浜まで出迎えに行く。せつちゃんとは久しぶりに会つたが大きくなつた。積丹半島旅行について、田田畠へ相談に行く。私も同行することにした。余市から五〇余名が、発動機船を買い切つて野球試合に来る。古平軍との決戦では古平軍が大勝利をしたとのこと

るものだ。一五年程前のリング全盛の後には、りんご園がエンドウ、ジャガイモのでん粉になり、今度は水田だ。しかしこれは確かに有益な事業なのだから、皆が一致してやれば出来るだろう。一時頃帰り、店の帳簿などの整理をする。七日は墓掃除の日だ。夜③に行き、和合会の話を聞き、後④に行く。過日の積丹半島旅行の話をなどをし

るものだ。一五年程前のリング全盛の後には、りんご園がエンドウ、ジャガイモのでん粉になり、今度は水田だ。しかしこれは確かに有益な事業なのだから、皆が一致してやれば出来るだろう。一時頃帰り、店の帳簿などの整理をする。七日は墓掃除の日だ。夜③に行き、和合会の話を聞き、後④に行く。過日の積丹半島旅行の話をなどをし

きなどやつて遊んでいる。

▼八月九日

今日も小雨が降る。和合会の件自分が過日旅行中に会合があり、その結果貯蓄の主旨を破り、一ヶ月も経たないのに会員外への貸出しを一〇〇円から五〇〇円に増額した。実に不都合した行為であり、平田君のところへ行き、大いに自分の意見を述べた。結局、自分の意見が通らぬので退会することにした。

▼八月一〇日

今日は朝から曇り空で、時々小雨が降る。婦美大謀からアバ繩三〇〇丸、実子繩二〇〇把を船で受け取りに来て、港町で待つていると電話が来た。早速自転車で出かける。一五、六人も来ている。九時頃までかかつて引き渡した。井兄さんの実家の老母が死亡したというのでお悔やみに行く。電話があり、湯内から刺網の客が来ているというので早速帰る。並一〇〇〇間、外にアバ繩などで二四〇円程が出た。午後三時、自転車で銀行へ行き、東洋への網代を払い込む。

一ヶ月程も遅れてしまつたが、金融の都合上止むを得なかつた。商人はどこも忙しいものだ。

▼八月一一日

起床六時 今日は井兄さんの老母の葬式に美国へ行くので早起きした。朝食後風呂敷包みを背負い、困の良一さんといつしよに行く。雨上がりの道路は美

国の坂辺りが悪いが、海岸の風景はいつ見ても良い。この頃の炎暑では、いつも海辺が恋しい。途中で休む。一〇時頃の出棺を送り、その後、(A)に寄る。赤岩大謀の吉田さんを訪ねいろいろ話をする。井戸網の照云がある。

四時頃出て、六時ヨに着く。夕食を馳走になる。

福来博士がお出でになるというので、ハシケで出迎えする。ついぶん大勢の人が出迎えに出ていた。明日から三回講演会がある予定だ。

▼八月一二三日

起床七時 今日は墓参日だ。こでも仏前のことと忙しそうだ。福来博士は今日お帰りになので、九時、夕種田の浜へ見送りに行く。扇面や色紙に揮毫されたが、名士ともなると書も

なかなか上手だ。いろいろ話をされ、一〇時半、豊丸で出発された。見送りも盛大であつた。博士の講演は近來になく有益で、一般にわかり易く好評であつた。

種田家が招いたもので、大いに感謝せねばならぬ。正午頃から雨、三時頃には大雨で道路もワ

チャワチャ。五時頃墓参したが、足駄でもとても歩かれぬ。ワラジがけの人もいた。あちこち廻り七時帰る。都会にくらべて田舎は、このように盛大に盆の供養をする。人情が深く、これは何としても伝えたい美德だ。

▼八月一四日

起床七時、昨日の雨には道路も悪く、墓参りには閉口した。今日も朝早くから墓参りに来る人がポツポツある。九時頃から暴風になり、家もミシミシする程だ。午後になり風も少し止んだので、一時頃から新地方面の仏参りに行く。(B)正ハ井平田半ヨに寄り、四時に帰

後、墓参する。大勢が来ているが、昨日も今日も風でローソクが立てられぬ。夜になつても風は止まぬ。煙に少々なつたり、ゴも、この風で大分落ちたとのこと。熊さんはリンゴ拾いに行

く。キミも倒れたのが相当あるとのこと。余市辺りでも相当の被害があるだろう。

▼八月一五日

起床七時、今日ようやく快晴の天気となつた。盆中なので皆仏参りで忙しい。このように仏を敬い先祖を尊び、日頃の交情を忘れずに墓参することは古

平町の美風として永く守つていただきたいことである。また昨夜(B)から三〇〇円電送方電信が来たので、今日自転車で銀行へ行き送金した。父は朝早く墓参りし、後仏参りする。仏前へは絶えずお参りの人が来る。私も一時頃、お参りの人が来る。私も一時頃、

今日は午前中、入船町、丸山町では恵比須神社(丸山下)の祭礼で賑やかだ。神社でお参りをし、相撲見物をする。子供の五人娘も面白かった。日が照りつけ、余

かさんが来られていろいろ話

をする。その後(C)へ行き、和合会退会のことについて事情を話す。夜、岡中川の老婆の通夜に行

ついた。蚊車が例年になく多いようだ。

▼八月一六日

今日は早く六時に起きた。墓参りと農園へでも行こうかと思つていたら、本陣の沢の伊藤さんへ仏参りに行つてくれとのこと。伊藤さんへしばらく話をし、七時半に帰る。リンゴはどこも不作、朝食後、△仲谷さんへ行く。阿波君から依頼の件を頼む。以下のところ欠員もない無いが、出来入れてくれるとのこと。よく頼んで帰る。今日は一六日、町中は店員や子供等もそれぞれ遊びに歩く。午後二時頃、共立大謀から品代の半金として八〇〇円を受け取る。早速銀行へ行つたが今日は午前中、入船町、丸山町では

惠比須神社(丸山下)の祭礼で賑やかだ。神社でお参りをし、相撲見物をする。子供の五人娘も面白かった。日が照りつけ、余

かさんが来られていろいろ話

をする。その後(C)へ行き、和合会退会のことについて事情を話す。夜、岡中川の老婆の通夜に行

き一〇時帰る。因では謡の稽古だ。畠町では盆踊りで太鼓の音が聞こえる。

八月一七日

起床六時、海岸を散歩する。のち港町弁天神社（厳島神社）の祭礼なので参詣する。朝の新鮮な空気に触れての散歩は、心地よい。境内から湾内を眺めると美しい景色だ。墓参りし、学校前を通つて帰宅する。朝食後、銀行行き。△大謀から八〇〇円の入金がある。団老婆の葬式を送る。小樽～から電話で、アバ繩一〇〇丸程入用との照会があり、極力勉強して売り込んだ。早速、丸に交渉、ヨの倉とえびす倉から積み込む。代金五〇五円、なかなかの金高になる。これからも佐渡でよい時期を見計らつて買付け、小樽方面へも発展せねばならぬ。本年は割合に売れ行きがよい。△大謀一五〇〇円、婦美赤岩大謀一〇〇〇円、と一五〇〇円、約四〇〇〇円売れ上首尾だ。夜、せつちゃん等と墓参りをする。盆踊りがあり賑やかだ。

行き、本年はリンゴ不作のと、
ろへ過日の暴風で大半が落ち、
仏さんへ供えるのもようやくな
程だ。梅は熟したキミもそろそ
ろ出盛り、キウリは終わりもの、
盆中なので花を取つて帰る。朝
散。子供等が釣り針を買いに來
るぐらいのものだ。本陣の干場
では青年団の競技があり、ずい
ぶん賑やかだ。このところ一般
に運動熱が盛んだ。午後の未広
丸で、大阪のおじさんが久し振り
で帰られるので、浜まで出迎
えに行く。しばらくぶりで話を
する。四時から火防組合の巡回
があり、支店主人と二人で旭部
落を廻る。終わって六時半帰る。
盆中で墓参りの人が多い。夜、禪
源寺和尚さんが来られたので、
先の和合会のことについて話を
する。私の脱退した理由につい
て残らず話した。遠慮なく意見
を述べて進退する、これは何ら
誰にも憚るところはないのだ。
和尚さんは九時頃帰られた。の
ち困へ行き、大阪のおじさんか
ら本年の海産物の委託したもの

八月一九日

起床七時、曇り空で時々小雨が降る。今朝はイカが大漁五〇〇から少ない人でも三〇〇は獲れたとのこと。雨のため売り値は安かつたが、この分だと今年

八月二日

は大漁ならん。雨降りなので、熊さんとヨの倉の片付けに行く。アバ繩を積み換える。三分の一ぐらいいは出たので倉の中はガラツとする。えびす倉の分もう二、五〇〇円、一六〇〇円はある。合計で四、〇〇〇円はあるだろう。これで手持ちの半数は壱れだ。一一時に終わり、甲でいろいろ話し、ヨに戻り昼食を馳走になり一時に帰る。妻トミやつちゃん等と記念写真を写す。せつちゃんは八から電話があり遊びに行き、八に泊まる。

▼八月二〇日
天氣快晴、イ
か。一〇錢に六

一円値買う。佐渡への土産に干して持参させよう。盆もいよいよ今日で終わりだ。五時頃から

八月三日

屋の前浜に着くし、板倉や土蔵があるのとて実に便利だ。ここを利用して商売をしていなのは、實に惜しい。朝食を馳走されたり、妻とトミ、悦二、四郎、せつちゃん等は①公園へ遊びに行く。聞けばこの朝、青年団員や有志一〇数名が積丹岳登山に出発したとのことだ。

8

天気快晴、日中はずいぶんと暑さが厳しい。昨日、加賀の小林

からたたみ表やゴザを送るがどうかと電信が来たが、見合わせるとの返電をする。暑いので子供等は本陣の浜へ行く。余り長い間帰つて来ないので浜まで行って見る。ヒルカイ、ガンゼ、ツブなどをとつて、火を焚いてあたつている。この時代は実に楽しいものだ。せつちゃんは支店の林一さんといつしょに入舸まで陸行する。一四日に帰る予定とか。小樽からアバ繩一〇丸の注文がある。夕方自転車で田まで行き人手を依頼する。

▼八月二三日

起床七時、日中の暑さはずいぶん厳しい。幸治は長尾君等と湯内まで遊びに行くと、六時頃にぎり飯を持って出かける。

私はえびす倉で、冬へ届けるアバ繩の荷造りをする。イカ売りが大勢来る、一〇銭に五ハイとのこと。妻は畠へ行き、キミや大根などを取つて来る。本年のリンゴの不作には参つた。夕方中村床屋へ散髪に行く。畠町から太鼓の音がしているが、まだ盆踊りをやつているようだ。一二日の月が輝いて良い夜だ。新聞があり、三〇〇、五〇〇獲れた

によれば、七〇号潜水艦が進水し、試運転中に沈没、八〇余名が溺死したという。大惨事だ。

▼八月一四日 天気快晴 今朝小樽行きのアバ繩を長栄丸に積み込む。店は閑散だ。暑いので悦三と浜へ遊びに行く。幸治は友達一四、五人と泳いでいる。農園では熊さんが一人で草取りをやってい

る。夕方河原へ出て見たが、夏の河原は涼しくてよろしい。旧一三日の墓参りに行く。困でも家族全員で行くのに会う。病

日午後一時頃逝去されたとのこと、惜しむべし。

▼八月一五日

天気快晴、今日は招魂祭なので各戸で国旗を立てた。横丹へ行つていたせつちゃんが今日帰るとの電話があり、熊さんが途中まで迎えに行き、午後四時頃帰つて来た。若林のおつかさんが茶津の坂まで送つて来てくれたとのこと。トミ、愛ちゃんは新

地まで招魂祭を見に行く。幸治

と父は海水浴だ。今日もイカ漁があり、三〇〇、五〇〇獲れた

という。風も無く、青空で天気は良く、実にもつたいないようなんは、午前中集金かたがた新地方への用事で行く。イカ漁も空だ。加藤友三郎首相逝去で、後継内閣につき政界はまたまた紛糾を極めている。

▼八月一六日 天気快晴 今日も暑さが厳しい。子供等は毎日のようく海や川へ遊びに行くので、体は黒ソ坊のようだ。午後一時から、信用組合で木材会社総会がある。一日割配當に決議し、三時散会した。

今日はまた近來に稀な暑さだ。寒暖計は、室内で八四度F(約二九度C)まで昇る。イカ漁は今日も七〇〇、八〇〇から、少ないところでも三〇〇ぐらいいは獲つたという。一〇年来の珍しい程の大漁だ。沢江、浜中辺でも川崎船を仕立てて乗り出るとの事があるという。一〇月頃までも、道中の無事を祈る。海は上ナギになつた。熊さんは、この頃イカが大漁だから出てみたいとい

うので、田の船に乗せてもらうことに出て出たが、結果は如何妻は午後、井さんの安産見舞いと、二兄さんの病氣見舞いに行く。今日は涼しく凌ぎやすい。父は末政の娘さんと、佐久間老父の通夜に行く。△大謀からマグロを貰い、夕食に食べたがうまかった。せつちゃん等は八時過ぎに函館着、一〇時の連絡船に乗り込むとのこと。

▼八月一八日 起床七時、昨夜来の雨は時々小雨に変わる。海はシケていて、いろいろ話しをする。

起床七時、昨夜来の雨は時々小雨に変わる。海はシケていて、

波の音が店まで聞こえる。熊さんは、午前中集金かたがた新地方への用事で行く。イカ漁も大漁なので、錨網用の三分半、四分のロープがよく出る。昨日に引きかえ今日は涼しくなつた。小樽新聞によると、總理大臣に山本権兵衛伯に大命が下つたとあつた。

▼八月一九日

一昨日の荒れも今日は晴れ上がりた。せつちゃんは今朝出発するので支度に忙しい。九時出帆の船で、支店の林一さんと同道した。皆で浜まで見送りに行き、道中の無事を祈る。海は上ナギになつた。熊さんは、この頃イカが大漁だから出てみたいといふので、田の船に乗せてもらうことに出て出たが、結果は如何妻は午後、井さんの安産見舞いと、二兄さんの病氣見舞いに行く。今日は涼しく凌ぎやすい。父は末政の娘さんと、佐久間老父の通夜に行く。△大謀からマグロを貰い、夕食に食べたがうまかった。せつちゃん等は八時過ぎに函館着、一〇時の連絡船に乗り込むとのこと。

(続く)

銀の鍵 わわやかな春のゆうべ

大澤文子

おなじ年頃の読書サークルの少女が五人、典子さんの家の一室に集い懐かしい物語りにふけつていた。その時、「あのう、今度は私の番なのねエ」

愁いをふくんだような瞳の、一番若い祐子さんがもの静かな調子で話はじめた。

||私がまだ幼い頃の記憶なんですけれども……。

その頃、父は高等学校の教師をしておりました。母も町の女学校の音楽教師として勤めておりました。古い校舎でしたので、母は古い古典的なピアノを鳴らし生徒に歌を教えていました。

授業が終わりますと母はピアノの蓋をして鍵をかけ、その銀の鍵を自分の椅子のひもに結びつけ帰るのでした。ある日、母は校長に呼ばされました。

「あなたは、ピアノの鍵を本当に自宅へ持つて帰っていますか？ たしかに？」

母は一度も銀の鍵を生徒に貸しましたことはありませんでした。

「あのピアノはいつ女学校でお求めになつたのですか？」

母は一度も銀の鍵を貸しました。翌日、母は校長に、

再度問いつめられると、母は不思議に思つたのです。でも、「はい、確かに持つて帰ります」と答えました。

白い髪をたくわえた校長の目には、一瞬、疑う様子がありありとみえたといいます。

「確かに他人に渡さなかつたであります。」

なおも校長は念を押したとい

ます。

「実はあのピアノのことです……不思議なことが」

やがて校長は、母にいろいろな話をしました。

「実は、放課後生徒が帰つてしまつた夕方になると、ピアノの美しい音色が聞こえてくるのですよ、勝手にピアノを弾くことは校則には許されませんからなア」

校長の語尾はいつになく厳しいものでした。

母は一度も銀の鍵を貸しました。

したことはありませんでした。

だが疑われた母は、不思議な

ピアノの音を確かめようとそ

のあとが……。

日の夕べ、私を連れて女学校の庭に入りました。月夜の晚でした。校庭は水を打つように静かでした。私と母は、講堂の外の石垣のかけに身をひそめておりました。その時、講堂でか

すかにピアノの蓋のあく音がしました。やがてボロン……ボロン……樂譜の上をまるで水晶の玉がまろぶように、妙なる音が小窓からもれてきました。

母の顔がサッと変わりました。ピアノの調べはイタリアの樂壇では名高い曲でした。やがてピアノの調べは止み、小窓が音もなく開きました。

スラッと抜きでたような美しい影。ブロンドの瞳。

月光の中に夢のように浮き出た一人の外国少女、あつ！ 私は思わず声をあげようとした。母はあわてて私を抱き寄せました。

少女は物音に驚きちょっと立ち止まりましたが、やがて夕闇の中に消えてゆきました。母はかすかに溜め息をつくばかりでした。

そしてその日限り、もう永久に夜に消えました。母は涙ぐむばかりでした。

あとで聞きましたが、故郷へ帰るためその町へ立ち寄つた少女であつたと伝えられました。

「あーあれはイタリアの婦人で、当地へ宣教師として来ていましたアンダーミュラー夫人が病氣で亡くなられた時、記念として寄付されたものなんですよ」

そして、母が樂譜を持つて講堂に入つて行くと、ピアノの蓋の上にブルーの勿忘草の花が一束置いてありました。その花の根元には赤いリボンで結ばれた銀の鍵がひとつ、うす桃色の封筒がはさんでありました。

母は、とどろく胸を押し静めそつと開きました。匂いも悪くきれいなイタリア語で、

『感謝をささぐ、昨夜のわねを見のがし給えるきみにー亡きアンダーミュラーの子マーリアー』と記されてありました。

母は涙ぐむばかりでした。そしてその日限り、もう永久に夜に消えました。母は涙ぐむばかりでした。

あとで聞きましたが、故郷へ帰るためその町へ立ち寄つた少女であつたと伝えられました。

サークルの少女達はただ潤んだ瞳を見交わすばかり、語り終えた祐子さんの顔にも一筋の涙

五十銭玉ものがたり

吉川義雄

大正生まれの私にとって、金銭感覚は、若い人達との差異は多分にあるのだろう。

戦前の「円」の呼称は、ずしりとした重みで人の口から言われたが、今の子供達は一円のアルミ玉はもちろん、十円玉を貰って喜ぶ者なんか誰もいない。百円玉になって、初めて貨幣として認知されているみたいだ。正月、孫達の様子を見ていてそれがよく分かる。

「錢」の単位がまだ巾を利かせていた時代、小学五年生の頃、登校時の雪解け道で五十銭銀貨を拾いあげた。

同行の友達は、私が何か悪いことをしたみたいな口調で、一斉に「早く警察に届けろ」と言いい立てる。幸か不幸か、そこは高台にある警察署の真下の港町通り、私は雪道に足を滑らしながら、生まれて初めて警察署の窓口に立つた。

受け付けた警察官は、マジマジと私の顔を見つめていたが、「お前にやるよ」と、アツサリ言つてその場を去つた。

いつも簡単に大金持ちになつた私を、友達は羨望の目でワイワイとハヤシ立てるし、私は私で、先生、親、欲しいアレコレと、頭の中がパニックをおこしていた。

当時の五十銭玉は、現在の五百円玉より価値ははるかに大きかつたし、易々と子供たちの持てるお金ではなかつた。

正月、親や親戚から貰うマジコでも単位は一錢から十錢どまり。貨幣の周囲がギザギザになつて、重厚な銀貨であるそのお金は、子供が使うモノなんかではなかつたのだ。

自分で好きなように使わせてくれと、必死で母を説得し、私は念願の買い物をすること

ができた。欲しくてもアトのことを考え、水彩絵の具と筆数本、パレット等を手にしたときは、天にも昇る心地であった。

明治生まれの親たちは、いくら説明しても今まで通りクリヨンで絵ぐらい描けるし、第一、ヨリか、と逆ギレされる始末。絵の具を節約しながら描く、私の淡彩画が、教室で妙な効果をあげて認められ、運動場や廊下にもはられて評判になつた。

雪解け道の中から拾いあげた五十銭玉が、私のその後の運命に深く係わり合つたようだ。

今ひとつ、五十銭玉に係わる想い出もある。幼年期の私を母親みたいに慈しんでくれた叔母がいた。

叔母は利尻にいた。そこからどんな経緯で我が家に来たのか分からぬが、美しい容姿の女性で、私は姉と思つたことはないが、わが家ではみんなネネと呼んでいた。

ある時、父に連れられて新地の銭湯からの帰り道、一人の男性に呼び止められた。長い立ち話の中で、父は盛んに敬語を使つた。

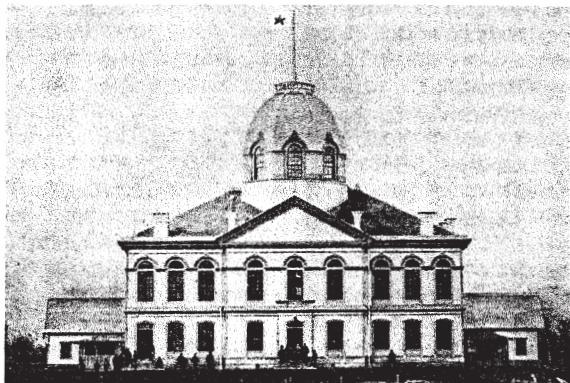
ついたから、私は誰か偉い人だろうと思っていた。

話の終わった頃、その人は突然財布を取り出すと、父の恐縮する声を無視して、私に五十銭玉一個を握らせ、妹さんにもと、さらにもう一個の五十銭玉を取り出して握らせた。

その人が、叔母の最初の夫となつた人で、嫁いだネンネは何年も経たぬうちにに戻りして來た。

その時の五十銭玉は、勿論私が使つた覚えはないし、妹に至つては話も知らないようだ。小学校を卒業すると札幌の書店に奉公に出て、最初に貰つた給金から、私は五十銭玉数個を握り、真向かいの三越に勇んで出掛けた。東京かどこかの「お菓子うまいもの展」が開かれていた。職人が腕にヨリをかけて創りあげたお菓子の行列が、大名行列のように展闊されて、いたのを覚えている。

どれでも買うことの出来る夢のような境遇に、私は買つようになり先にウツトリした。一個五十



◇開拓使庁舎が完成

明治二年九月、開拓使長官は東久世通禧(ひがしくぜみちとみ)に代わると、箱館を函館に改め、開拓使函館出張所を設置しました。そして、石狩平野に位置する札幌に開拓使本庁を建設することが適当と判断し、直ちにその建設に取りかかりました。

開拓使本庁の建設に当たった判官島義勇(しまよしたけ)は、小樽郡錢函に開拓使仮役所を置くことにしました。

↑ 完成した開拓使本庁舎

現在に残る札幌の街並みは、そのときの計画を今に伝えていきます。

翌六年には洋風建築の開拓使札幌本庁舎が完成しましたが、わずか六年後の明治一二年、惜しくも焼失してしまいました。現在、北海道開拓の村に、当時の建物を再現したものが建てられています。正面からの外観などはそつくりですが、内部の構造は利用するための便利な施設が設けられています。

一 蝦夷地から北海道へ 地方自治の移り変わり

現在に残る札幌の街並みは、そのときの計画を今に伝えていきます。

港町・厳島神社(創建当時は恵比須神社)を宝歴元年(一七五一)に創建しましたが、後に、古平運上屋の支配人となつた城川長次郎が天保一五年(一八四四)、その境内に御影石の灯籠一对を寄進して、それが現在も残っています。

創建しましたが、後に、古平運上屋の支配人となつた城川長次郎が天保一五年(一八四四)、その境内に御影石の灯籠一对を寄進して、それが現在も残っています。

蝦夷地では、江戸時代から漁業は盛んになりましたが、開拓特に農業は進みませんでした。それは、内地の農業のやり方では無理であったことや、松前藩の体制が土地の開拓を妨げていたからです。これからの北海道の開拓を阻害するものを取り除くための一つが、場所請負制度の

当初、本庁舎や街路の建設に当たつた島義勇は、冬期の工事の困難さに加えて食料も欠乏し、予算を使い果たしたということ

で免官されるという事件? もありました。

代わって建設を担当した岩村通俊(いわむらみちとし)は、明治四年四月、仮本庁舎を建築し、五月、開拓使庁は函館から札幌に移されることになりました。

岡田家でした。岡田家は一時期には現在の小樽・積丹・岩内・磯谷・寿都などでも場所請負をしていましたほどの豪商で、約一七〇年間にわたつて古平場所の請負

◇場所制度の廃止

の関税などによつて支えられていきました。

明治二年(一八六九)、いろいろと弊害があるということで、開拓使は「この場所請負制度をすべて廃止する」とにし、西部の一三郡(増毛・浜益・厚田・忍路・余市・古平・美國・積丹・古・岩内・歌葉・寿都・島牧)の請負人に対して通達(布達)を出しました。

これまで場所請負人が商売を独占してきたのには、松前藩や幕府の後盾があつたからで、その代わり場所請負の運上金はどんどん高額になりました。また、御用金などが課されて、漁業などの生産が上がつても請負人の負担が増えたことから、それがアイヌの人達への労働の強化、搾取となつていきました。

蝦夷地では、江戸時代から漁業は盛んになりましたが、開拓特に農業は進みませんでした。それは、内地の農業のやり方では無理であったことや、松前藩の体制が土地の開拓を妨げていたからです。これからの北海道の開拓を阻害するものを取り除くための一つが、場所請負制度の

ともいえる御用金、旅商人から

開拓使初期の官位と支給された現米

長官一次官一判官一権判官一大主典一権大主典一少主典一権少主典一史生一使革一使丁(使部)一付属一付属助一御用掛
七〇〇石 五〇〇石 三四〇石 二七〇石 八五石 六七石 五〇石 三五石 二六石 二〇石 一五石 一〇・七石



↑ 明治 2 年・開拓使による漁場請負人廃止の布達

<古平町史編纂室原本所蔵>

西開拓使

明治維新という大きな時代の
変革があり、これまでのよう

一人の商人が漁業権も独占して
強大な力を持ち続けることは地
域の発展を妨げるとして、場所
を請負制を廃止する通達を出した
わけですが、急に廃止すること

は、その地域から商店や銀行が
いつぶんに無くなるようなもので、
現状から考えて住民にとつては
不便な面もありました。

開拓使も、急に廃止したのでは
何かと差し支えもあるうかとい
うことで、年々じよじよに廃止す
るということでしたが、驚いたの
は請負人達で、特に西海岸の請
負人達は連名で嘆願状を出ししま
した。それではと、当分は漁場
持と名前を変えて、今までど
おり漁場經營ある程度認めまし
たが、明治九年にはすべての漁場
持を廃止しました。

岡田家ではその廃止直前の慶
応二年(一八六六)、種田徳之丞
外一名に古平場所の請負を譲渡
しています。

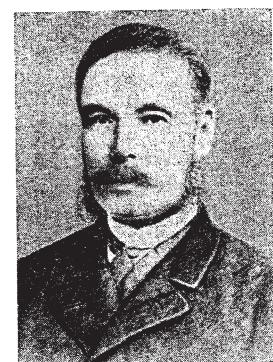
◇開拓使長官黒田清隆

北海道は日本にとって未開の
宝庫でしたが、政府の基盤も充
分でないときでしたから、まさ
に国内は難問山積という状況で
いました。

こんなとき北海道開拓の基盤
を築いたのが、第三代開拓使長
官となった黒田清隆でした。

黒田清隆は、薩摩藩の禄高わ
ずか四石という家に生まれまし
たが、征討軍として鳥羽・伏見の
戦いから、函館戦争では榎本武
揚の助命嘆願に働きかけをして
新政府の要職につきましたが、
明治三年、三十歳の若さで開拓
使次官となりました。

← 黒田清隆肖像画



黒田は次官に就任すると、権
太よりも北海道の開拓に力を注
ぐことが現状では得策であるこ
とを政府に申し立て、それが認
められ、外国人を顧問として招
くため、留学生と共ににアメリカ
に渡りました。

アメリカでは大統領に会い、開
拓使顧問を招くことを依頼しま
した。そして農務長官のケブロン
にも会って、現職の長官が、開拓
使顧問として赴任するとの快
諾を得たのです。現職のケブロン
が、後進国である極東の一小国・
日本に赴任するということに、
黒田次官は大変な喜びようであ
つたといいます。

帰国すると、顧問団の助言に
より開拓使一〇年計画を定め、
札幌に開拓使本府を開き、官庁、
学校、工場を建て、西洋から新
しい作物や家畜を入れ、本州か
ら移民を招き、漁民の定着、漁
法の改良や加工を進めた外、鉱
物や地質の調査などにも当たら
せました。

連作

14

坂本甚衛

—地質調査の旅(2)—

調査に、白岩が終わる直前去つて行つた。

余市橋の牧歌的に細長い木橋を、現在のようなコンクリート製の永久橋に架け替えるべく、地質調査に取りかかったのは昭和三〇年代後半のある初秋だった。

都合三回行つたうちの第一回目が、である。その前、一夏かかるつて私と同僚一人は白岩町(旧出足平)に宿をとり、作業員を雇つて現白岩トンネルの掘削試料となる岩層調査に携わつていた。暑い夏だつた。入、出□各一箇所と山頂からの一本、計三本試錐し終えたら秋風が立ち、私と同僚の一人は余市橋をやつてくれと言われた。他の同僚一人は網走開建の依頼で港湾

ろ、或は油圧による大がかりな一万メートルも掘進する石油層用する機種はロータリーとパーカッショーンの二種類しかない。

岩盤を試掘する機種は、ロータリー機といい、文字通りダイヤモンドの刃か、メタルクラウンを高速回転させて岩層を掘進採取する種類のマシンである。この場合、採取したコア(試料)を目前にして、○○岩で硬度の割合何パーセントになるか、どの目安を決める基礎知識を得るには、少なくとも両三年の絶え間ない経験と勉学が必要とよく叱咤されたものだ。代わつて、

余市橋のような河川地帯では口

一タリーは使用出来ず、使つたとしてもクソの役にも立たない。パークッシュンなる上下垂直運動による機種を選択するしかない。大体、地表の地質調査にしろ、温泉ボーリングにしろ、或は油圧による大がかりな一万メートルも掘進する石油層用する機種はロータリーとパーカッショーンの二種類しかない。

独り立ちした最初の頃、ロータリー機を運転していく一番困るのは、採取した岩層を見て一目で○○岩と判定出来ぬ現実だった。要はまだ未熟で知識も経験も備わつていないので意味する。

所属する開発土木研究所調査課には、こと地質学に関する限り博士級の先輩技官が何人もいて、教えを乞えば噛んで含めるように教えてくれるが、入所後一年間の講義も終わり、各地へ一人で出張している現状ではそれも適わない。

岩石の種類は何十種となくある。何事も経験で、数多くこな

していくうちに自然とそんな蘊蓄も身についてくるのだが、総じて成る程と氣付くのは、世の中あとになつてからが多いようである。

私の調査員生活の中で、少しばかり異色な外国での調査について触れれば、何と言つても石油開発公団を通じて派遣された熱砂のイラン、サルベスタン油田鉱区で、八ヶ月にわたる徹底したロータリー運転技術を受けた経験だろう。暑熱に喘ぎながらも苦慮した砂漠での生活は永遠に忘れないと思う。

ロータリー機は日本では利根一カ一もいろいろあるが、どの機械も使用法は半年もすれば一応はマスターできる。現在の機械には、旅客機のコックピットのように計器が所狭しと複雑に取り付けたのが大部分だが、たいして怖がるには及ばない。回転して掘進する理に変わりはないからだ。

一転してパークッシュンとは、エンジンか、もしくは

中連

泣き笑いの樺太漁場体験記

戦後

思い出に つらい別れをした
残るもの。その後、当時は交通の便も通信機関も充分に回復しておらず、連絡も思うようにとれない状況の中で、あの人達の消息が一切不明になり、残念ながらあきらめるしかありませんでした。ただただその無事を祈るばかりでした。

失意と不安のドン底にあつたとき、偶然とは言え不思議な別世界の楽団に迷い込み、仲間と共に楽しんだひとときが、すべて幻の中の出来事であつたかのように、今は彼方へ消え去つてしましましたが、互いの胸の奥に残る貴重な体験でした。

家業も再開 さて、公演を「ズラステー」終えた私達の白樺樂團は予定どおり解散

商店や町工場なども次第に再開され、また、理髪店や銭湯もいち早く開業して、以前のような緊迫した状況から、生活の雰囲気が戻ってきたようでした。

銭湯へはソ連人も入浴に来ます。日本人と双方が相手国の言葉を片言交じりで、身振りで手

繰り網でカレイやサメ、ときにはタラバガニなども獲れました。従前通り漁業組合を通じて出荷し、野村丞次郎さんが責任者である水産会社に納入していました。

商店最大の祭典ともいわれる「革命記念日」の日がやって来ました。前日から街頭や家の周囲の清掃命令が出て、それには日本人も加わりました。ソ連人の手によって、目立つ場所にはレーニンやスターリンの大きな肖像画が飾られ、町のいたるところにソ連スタイルの装飾が施され、見違えるような奇麗な町並みに変わりました。もしここに

吉野慶一郎

「ズラステー（今日は）」
と、笑顔で挨拶する光景が見られるようになり、日ソ間のカーテンは消え去り、明るさが町に広がりました。

私達の音楽会が小さな実を結んだのかも知れませんが、あのM隊長の温情があつたことも見逃すわけにはいきません。

革命記念日が そして十一月十日、ソ連国籍愁を誘う 十日、ソ連国

モーターの回転を垂直の上下運動に替え、地層を採取 P-P (ドライヴ・パイプ) を打ち込んで推進していく方法である。五、六メートルある棒状のツールズと称する重量物を落下させながら、当然、ロータリーよりははるかに高い頑丈な構を必要とする。私の貧しい経験からいえば、パークッシュョンはかなり高度の勘が要求されるのでは、と思うときがある。勿論、あらゆる地質に対しても経験と訓練に学ぶ態度がその前提となるのだが……。

内科医が、聴診器で心音を聞き取つて異状の有無を察知するごとく、片手に握つてているワイヤーの感触を感じて、地層の変化が分かるようになつたらしめたものだ。

さて、ボーリング・マシンについての予備的な御託はこのくらいにして、次号からそろそろ余市橋調査の本文に入つて行くことにしたい。



ろうなど、郷愁に誘われる光景でした。

翌日は軍隊を先頭に、レーニン、スターリンの肖像写真を掲げ、プラカードや国旗、赤旗を手にした民間人が整然と町中を大行進するのです。小学校校庭に到着すると、そこで偉い人達が代わる代わる壇上で演説し、革命記念日を祝福してレーニン、スターリンの偉業を讃え、最後はソ連国家の万歳を唱え、大歓声と拍手の中に式典は終了し解散となりました。

そしてこれからが、皆が待ち望んでいた国民の祭典休憩日になります。街角や小さな空き地には、グループごとに即席ピヤガーデンが出来て祝杯を挙げ、パライカやアコードオン等の楽器を鳴らし、たちまち歌やダンスが始まります。さすがに音楽好きの国民だけあって、町中は大賑いです。

特に、ロシヤ民族衣装の可憐な乙女達が肩を組み手をつなぎ、合唱のハーモニーもダンスのステップもよく揃うすばらし

…と遠慮しましたが、強引に飲まされた仲間もいました。

今日は無礼講のようですが、



◀ロシア民謡「カリンカ」の挿絵

さは、即興とは思われぬ天才ぶりでした。

お祭り大好き 陽気なソ連人 と見物していきました私たちも、ついつい拍手をおくりました。その時飲んでいたニコニコ顔のおじさんが突然倒

へ来て、「あなた達は、先日の白樺樂団の人ですね。よく分かります。今日はソ連國のお祭りです。日本人も同志です。いつしょに飲みましょう」

酔っ払いのケンカも見えず、陽気なうらやましい光景でした。

夜になつても賑いは続き、ソ連人の住宅の窓からは、明るい笑い声と部屋の明かりがもれています。終戦間もない樺太の小さな野田町で、まだ数少ないソ連人の祭りでさえこの賑いを見せつけられたが、ソ連本国の町や、いやモスクワの場合はどうな光景が現出されるのかと、想像するだに興味がわきます。

祭りが終わって取り片づけられた後は、何事も無かつたように町は元の姿にもどつたのにはなにか寂しさを感じられました。ソ連人にとつてはなおさらのことと思われます。

そして、いよいよ近づいた冬に備える支度で多忙となり、今年はいつたいどんな冬を迎えることやらと、不安を抱いていました。

そんな折でした。突然、雪も寒さも一瞬に吹き飛ばすような、明るい温かい知らせがM隊長から伝えられました。

▽暦を見ると、四日は《立春》とあります。大寒(二月五日)が過ぎて半月、北海道ではこれから寒さが本番というのに、春とは言ばかり、という感じがしますが、九州からは早や梅の便りです。しかし、春という実感がないのは暦のせいです。北海道ではちゃんと表していて、特に農作業に向いていました。十五夜といえば十五日の満月ということですが、今の暦では十五日の夜に必ず満月になるとは限りません。お正月を月遅れで迎える人はいるませんが、お盆は、ひと月遅れて迎え火をするのが一般的の習慣です。日本人は二つの暦を器用に利用して、四季を取り入れた生活を楽しんでいるのです。

▽このごろは確かに日もながくなりましたが、古平でも、冬至からみると一月末で日の出は一八分早くなり、日の入りが三四分遅く、日没が遅くなつたことで、日のながさがはつきりと感じられるようになりました。

—山中に陣地構築—

私の所属する第一大隊は上敷香町の泉部落の山中に、本土決戦で米軍の上陸が近いことを想定して、それに対応できるように対米陣地構築作業を行うことになった。

残雪の中を、恵須取駅から私たちちは重い資材を泉部落の山中に入り、幕舎生活をしながら中隊ごとに陣地構築を始めた。私と同年兵の川口ラッパ手の二人に、中隊の炊事係を担当するよう坂東准尉から命ぜられた。

「待つてました！」
と言いたい気分だ。

何しろ陣地構築作業はつらい重労働だ。炊事班の班長は大西軍曹で、うるさいことは何も言わない人だ。後藤伍長は栄養やカロリーなどの計算をする事務担当と、炊事の責任者

である。温厚でよく頭の切れる人で、炊事のことは一切私と川口に任せてくれた。それに体の弱い初年兵の加藤と中村が加わり、後藤兵長以下五人で掘つ建て小屋を建ててその中で生活し、私と加藤、川口と中村がチームを組んで、中隊全部の食事作りを始めるに至った。

陣地構築という仕事は重労働であり、腹が減るのを少しでも軽減してやりたいと、炊事係も献立に苦労したが、何しろ配給の米が少ない上に副食の材料もカビの生えたような身

た玉ねぎ、季節によつて生鮭なふき、塩鮭、凍つ副食の材料もカビの生えたような身

た玉ねぎ、季節によつて生鮭なふき、塩鮭、凍つ副食の材料もカビの生えたような身

た玉ねぎ、季節によつて生鮭なふき、塩鮭、凍つ副食の材料もカビの生えたような身

た玉ねぎ、季節によつて生鮭なふき、塩鮭、凍つ副食の材料もカビの生えたような身

た玉ねぎ、季節によつて生鮭なふき、塩鮭、凍つ副食の材料もカビの生えたような身

た玉ねぎ、季節によつて生鮭なふき、塩鮭、凍つ副食の材料もカビの生えたような身

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

26 橋 義 春

モギなどの野草を取つて来てはご飯に混ぜたり、副食の足しに出るのは塩漬けのふきの皮と玉ねぎの皮だけで、あとは何にも無し。どうしようもないでの、玉ねぎの皮を煮て食べさせようとした。

作業が休みの日は、各班ごとに上敷香の町へ買い出しに出かけ、かまぼこやさつま揚げなどをまとめて買って来て栄養の補給にした。ところが突然、大隊長の命令で、皆が買い出しに行

くと一般住民の食料が不足になり迷惑をかけるので、今後また上敷香の町へ買い出しに行

りならぬということになった。樺太は本土と違つて、終戦までは比較的食料が豊富などころであり、特に魚は豊漁で、店には魚の加工品がいつも沢山並んでいた。買わなければ売り上げが減つて店の方で困るのは、とも思つたが、大隊長の鶴の一聲で食料の買い出しは禁止とな

り、困つたのは空き腹を抱えた丘隊達だつた。

大隊本部の命令で、現地自活の一環として中隊で豚を飼うことにになり、つがいの豚二頭が送られて來た。何しろ食べ物の絶対量が不足しているので、豚の

入つて、それが元でそれこそトン死でもされたら責任問題にな

る。

（続く）



吉平俳句会



吉平町岬短歌会

省略の出来ぬ性分年用意

斎藤波留

鏡台に向へば背なに冬日差す

山口悦子

冬岬波荒ぶける囲船

越野敏雄

鈍色の海を包みて冬晴れる

大和田絵伊

上弦の月凍つる夜の一旬欲し

高橋重子

定休日一ト日賀状の筆走る

仲谷比呂古

塩鮭の海峡渡り街駆くる

室谷弘子

磯を打つ浪音高し師走来る

泉清三

何もかもすっぱり捨てて年を越す

外山俊久

海鳴りを遠くにしたる虎落笛

渡辺嘉之

霜おりて少し膨らむ北海道

堀典子

雪背負ひ羊蹄山こゝに座りある

本間寿昭

灯台の天辺越ゆる冬の波

越野清治

帰省せし汝のピアノに合はせ歌ふ息子の家に楽し年のはじめを
厳寒と言ふべき日暮れ地底まで揺るがすごとき海なりの音

池田テル

鈴木時子

七草の朝の厨は忙しも夫と二人の食卓なれど

丹中香苗

吹雪明け流れもせまき古平川を水脈長くのぼり行く鷗

丹後初江

陸と陸とぶつかり成りしとふアボイ岳海底より授かりし
アンモナイト

寺内りょう

雪にこもる部屋ぬちぬく鉢植ゑのハイビスカスは次々と咲く

東美知

面構へ良きとは言へぬ鮫鱗の捌かれし身の淡き桃色

堀典子

教科書のいまむかし

◇文部省が教科書編集

明治六年頃になると、今までのように中国から渡つて来た書物や、往来物といわれたものから一変して、文部省が編集した教科書が出回るようになります。

しかし、それらは欧米の翻訳ものでした。

明治六年に初めて出たのが『小学読本』で、その第一課を開いて見ると、

「凡世界に住居す人に五種あり

○亞細亞人種 ○歐羅巴人種

○メレ一人種 ○亞米利加人種

○阿弗利加人種なり、日本人は
亞細亞人種の中なり」

とあり、五大人種の図が出ています。

この小学読本の最初の言葉は今だと何か奇妙に聞こえますが、長い間東洋の片隅に閉じこもつていて、日本、中国、印度ぐらいの範囲が世界だと



思っていた人々が多かつた当時には、とても新鮮な知識として受け入れられ、大きな影響を与えたといわれています。

この教科書は、アメリカの本をほとんどそのまま訳したもので、中にはこんな文章もあります。

「この猫を見よ。寝床の上に居れり。これはよき猫にあらず」

← 小学読本

明治の頃に戻つて、どんなことを言つてゐるのか考えてみてください。

当初は小学校での教育も知識が優先される傾向が強く、道徳的な面は軽く見られていて、

修身の教科書も一、二年生だけが「修身口授(きょうぎのさと)」として、先生が生徒に話しかけて聞かせるという程度のものでした。

これは、初めて知つた西洋文明の発達に驚いて、「欧米に早く追いつき、追い越せ」とばかりに、知育偏重の考えが強かつたからでしょう。

小学生徒心得

第一条

一、毎朝早起キ顔ト手ヲ洗

ヒロヲ漱ギ髪ヲ梳キ父母

ニ礼ヲ述べ朝食事終レバ

学校へ出ル用意ヲ為シ筆

紙書物等ヲ取り揃ヘ置キ

テ取落シナキ様致ス可シ

但シ出ル時ト帰リタル

時ニハ必ず父母へ挨拶ヲ

為ス可シ

一、毎日学校ハ必ず受業時間十

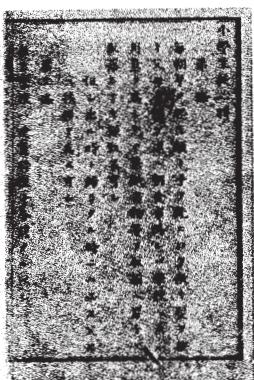
第二条

学校ハ必ず受業時間十

分前タルベシ (以下略)

← 小学生徒心得

◇欧米の事情を知る

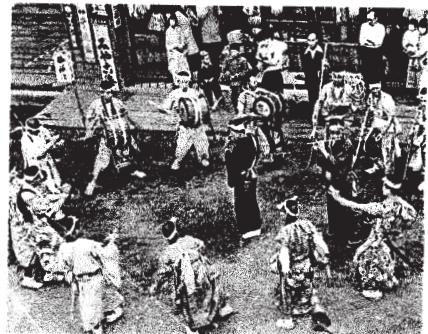


西洋の文明を広く知らせるということから、地理の教科書には世界地理が多く取り入れられ、福沢諭吉の『西洋事情』という本は大評判でした。

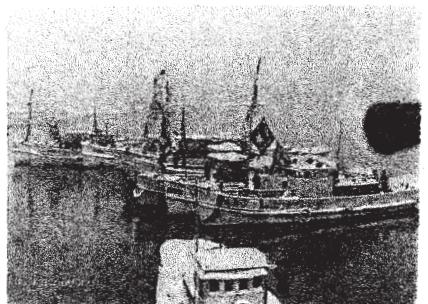
これより先の明治四年、新しい時代のさきがけともなった福沢諭吉の『学問ノススメ』十編は、刊行以来ベストセラーとして、大いに新しい考え方や知識を広めました。

古平町史年表

- ▲今之浜で古平小学校児童の水泳講習会が行なわれる
- ▲札幌・小樽方面から周遊団が来遊し、築港に百数十人が上陸する
- ▲大日本国防婦人会の映画会が小学校であり、600余人が集まる
- ▲主に新地町方面の児童で結成されていた「七つ星会」が、古盛座で演芸発表会を開き満員の盛況となる
- ▲共栄丸が、転覆した入舸村の運賃積み船を発見し小樽港へ曳航する。乗客5人と船頭が溺死したが、乗組員3人が救助される
- ▲後志青年弁論大会が余市町昭和座で開かれ、古平町から3人が出場する
- ▲鴨居木で小学校3年生の児童が川で溺死する
- ▲発動機船で積丹へ釣りに行った今村某が、帰途、海に落ち、10月末に天塩海岸で溺死体で発見される
- ▲泥の木の豊年踊りの囃子と余市青年団の鯨場網起し音頭がラジオで放送される
- ▲陸軍大演習観兵式に、古平軍友会員20人が会場での観覧を許可される
- ▲演習の帰途、古平沖を通るお召艦を歓迎のため小学生や町民が群衆來村まで旗行列、高台から見送りをし琴平神社で安全祈願をする
- ▲土場でのんびん工場が、モーターによるイモ摺り機械を設置する
- ▲国防婦人会が主催する時局講演会が小学校で開かれる
- ▲古平信用組合が建造した漁船5隻の進水祝賀会が行われる
- ▲古平尋常高等小学校保護者会が発起人となり、新設グランド建設工事の寄附を集め
- ▲グランド建設工事に町民が勤労奉仕をする
- ▲陸軍大演習期間中、火防組合が特別警戒に尽力したということで北海道庁長官から感謝状を受ける
- ▲グランド建設工事が始まり、青年団が勤労奉仕をする
- ▲早朝に、沖村で住宅から出火し2戸を焼失する。提灯の火力原因であった



↑ お祭りで人気のく豊年踊り



↑ 第1次・進水した5隻の新造船



↑ グランドの整地作業に勤労奉仕



↑ 古平の景勝地である觀音滝